

「思考力・判断力・表現力」を育む社会科学学習の工夫

～ICT を効果的に利活用した学び合いを通して～

糸満市立喜屋武小学校 仲田大地

I テーマ設定の理由

文部科学省は令和時代のスタンダードとして「これまでの我が国の教育実践と最先端のICTのベストミックスを図り、教師・児童生徒の力を最大限に引き出す」と述べている。このような新たな教育の時代に対応するために子供たち一人一人に個別最適化され、資質・能力が一層確実に育成できるICT環境を整えることが求められていると考える。

このような状況を受け、小学校学習指導要領では主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して3つの資質・能力の育成を図っていくと述べられている。その資質・能力の一つである「思考力・判断力・表現力」について小学校学習指導要領解説社会編(以下、「解説社会編」と表す)では、「小・中・高等学校を通じて、児童生徒が主体的に考えたり選択・判断したりして表現する学習活動を重視しながら育成していくことが大切である」と述べられている。しかし、全国学力・学習状況調査の報告書によると国語や算数どちらも理由を明確にしながら自分の考えを表現することについて全国的に課題があるとみられた。そこで、児童が主体的に考えを張り巡らせどのような情報が必要なのか選択・判断し、相手にわかりやすく表現する力を育成することが重要であると考え。

これまでの社会科の授業実践を振り返ると、「思考力・判断力・表現力」を育む観点から、資料を見比べて気付いたことやわかったことを交流させてきた。しかし、新たな「問い」を引き出せなかったり資料を関連付けたり、社会的事象の特徴や因果関係、条件まで深く思考したりすることはほとんどみられなかった。そのため、自分の意見を裏付ける根拠が曖昧だったり、説明が不十分で相手にうまく伝わらなかったりといった状況がよくみられた。

そこで、本研究ではこれまでの教育実践の良さとICTを効果的に利活用したベストミックスを図っていく。教師側からはデジタル教材やデジタル思考ツール、検索リンクなどを提示することでICTの効果的な利活用の手立てとする。その中で児童一人一人の実態に合わせて学び方や考え方を選択・判断させる場を設定することで児童自身が多様な探求方法、多様な表現方法に触れ、どのようにICTを効果的に利活用したらいいのか学び方を学ぶことができると考える。学び合いでは対話を通して相手の意見を理解し、吟味して自分の考えを再構築したり新たな「問い」が生まれたりできるようにしていきたい。

このような学習活動を展開していけば、新たな「問い」を見付けられるようになり、児童の「思考力・判断力・表現力」が育まれるのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

社会科の学習においてICTを効果的に利活用した学び合いを行えば、学びを調整しながら新たな「問い」を見付け、児童の「思考力・判断力・表現力」を育むことができるであろう。

III 研究内容

1 「思考力・判断力・表現力」について

(1) 社会科における「思考力・判断力・表現力」とは

小学校学習指導要領総則編(以下、「総則編」と表す)では、「思考力・判断力・表現力」について「様々な事象を情報とその結びつきの視点から捉え、複数の情報を結びつけて新たな意味を見出す力や、問題の発見・解決等に向けて情報技術を適切かつ効果的に活用する力を身に付けていること」と示されている。また、「解説社会編」では、「社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考える力、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて、学習したことを基に、社会への関わり方を選択・判断する力である」と示されている。

これらのことから、「思考力・判断力・表現力」とは様々な情報から意見を裏付ける適切な根拠を選択・判断し、問題解決のために適切かつ効果的に ICT を利活用することで身に付く力だと考える。本研究では情報を集める時や根拠をはっきりさせたい時、自分の考えをわかりやすく表現する時などに ICT を効果的に利活用することで「思考力・判断力・表現力」を育てていく。

(2) 歴史学習における「思考力・判断力・表現力」を育むとは

北(2017)は「思考力・判断力・表現力などの能力は、学習をとおして螺旋を描きながらスパイラルに徐々にはぐくまれていく性質をもっています」と述べている。学習経験を積みながら量的に増加していく「知識や技能」と違って「思考力・判断力・表現力」は学習を通してスパイラル的に徐々に育まれていくと考える(図1)。一見、成長していないように見えることもあるが質の深まりとして変化し成長していくと考えられる。さらに、「主体的、協働的に探究し、その成果等を表現することによって、知識や技能を習得すると同時にその過程において思考力・判断力・表現力など問題解決に必要な能力を身に付けていく」と述べている。

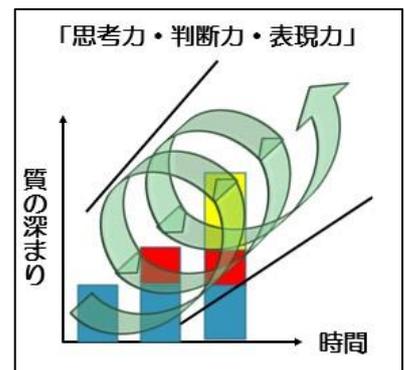


図1 北(2017)を参考に作成

また、「総則編」では『何を学ぶか』という教育の内容を選択して組織していくことと同時に、その内容を学ぶことで児童が『何ができるようになるか』という、育成を目指す資質・能力を指導のねらいとして明確に設定していくことが求められている」と示している。

そこで、本研究では単元を貫く大きな「問い」をもたせ、社会的事象について探求し、その情報を比べたり、関係づけたりすることで歴史的な背景をより理解することができる。そして、「なぜ争いが起こったのか」「どうして大仏を作ったのか」などの「問い」について学び合いを通して相手の意見と自分の意見を比べ吟味し、さらに新たな意見を再構築することで思考力・判断力・表現力が育まれると考える。また、表現方法を選択・判断して学び方を調整したり自分の考えが再構築されて新たに考え方の調整が行われたりするとき学びが調整されたと捉える。児童自身が「どのように学ぶか」を選択・判断できる環境を整えることで学びの調整を行いながら歴史学習における「思考力・判断力・表現力」を育むことができると考える。

(3) 「思考力・判断力・表現力」を育むポートフォリオ評価

北(2017)は「知識や技能は比較的目に見やすい学力であるのに対して、思考力・判断力・表現力は目に見えにくい学力」だと述べている。また、文部科学省は「思考力・判断力・表現力」の評価について「作品の制作や表現等の多様な活動を取り入れたり、それらを集めたポートフォリオを活用したりするなど評価方法を工夫すること」と示している。

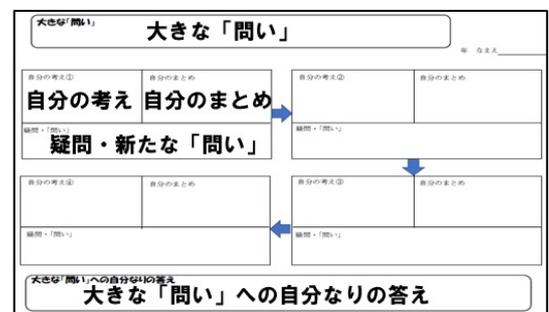


図2 ポートフォリオ評価

本研究では、一枚にまとめたポートフォリオ評価(図2)を取り入れて児童自身の考えがどのように変化していくのか思考の足跡をポートフォリオに記入する学習活動を行う。目に見えにくい力である思考力・判断力・表現力が授業を重ねていく中で学び合いを通してさまざまな考えに触れ、どのように育まれていくのか可視化を図る。そうすることで、見えにくかった児童の考えを見取ることが

できると考える。また、学び合いを通して納得できる相手の考えを追加し、自分の考えが吟味された調整の跡を残せるようにすることで児童自身が思考の変化や深まりを感じられると考える。疑問や新たな「問い」を書き出していくことで児童が自分の「問い」をスタートにおき、主体的に授業に取り組めるような手立てとしてポートフォリオ評価を活用する。

2 ICTの利活用について

(1) ICTの利活用とは

中央教育審議会は資質・能力を育むためのポイントとして「これからの学校教育を支える基盤的なツールとして、ICTの活用が必要不可欠」と示している。また、学校教育の質の向上に向けて「ICTを『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善に生かすとともに、従来は伸ばせなかった資質・能力の育成や、これまでできなかった学習活動の実施、家庭等学校外での学びの充実」に活用することが示されている。さらに、デジタル庁は教育データ利活用ロードマップでこれから目指すべき学校の姿として「子供たちの成果物や思考過程を画面で可視化」「即時表示で時間配分効率化」「意見・回答の即時共有を通じた効果的な協働学習」などを示している。

これらのことから、様々な学習場面でICTを効果的に利活用して資質・能力を育み、学校教育の質を向上させていくことが望まれていることがわかる。本研究では、これまでの教育実践にICTを取り入れ利活用を図っていく。思考を可視化するねらいでICTを活用する時、可視化したものを即時共有したり、新たな情報を検索したりすることができる。このように、ICTを活用しながら効果的に利用された時に本研究ではICTの利活用が図られたと捉える。

(2) 社会科におけるICTの効果的な利活用

新潟大学教育学部附属新潟小学校(2017)は「ICTを活用することで、多くの情報を入手することができ、記録することができ、そして必要に応じてそこから選択した情報を誰かに提示することが可能」と述べている。また、「解説社会編」では、「児童一人一人が図書館やコンピュータなどを活用し、学習問題などについて調べて考え、表現し発信できるようにするため、いつどの場面で、どのように図書館やコンピュータなどを活用するのか、児童の活動場面を想定しておく」と示されている。

これらのことから本研究では、主体的に課題を解決していく中で情報の調査や意見の交流、発表や振り返りなど様々な学習場面で教育的効果が高いと考える際にはICTの利活用を取り入れていく。社会科の授業の中で教材・探求・表現・ふり回りなどで教師が意図してICTを利活用した手立てを取り入れていくことでどのような効果が得られるか検証していく(表1)。その際には、いつどの場面でどのような教材が適しているのか精選した教材開発に取り組んでいく。また、ICTによる教材

表1 ICTを効果的に利活用したと評価できる視点

学習場面	教師の手立て	ICTを効果的に利活用した時に期待される児童の姿
教材と出会う	・デジタル教材	・教材を活用して対話の促進が図れる。 ・自分の考えの根拠となる情報を選択、提示できる。 ・児童同士で新たな教材を共有し合う。
探求する	・検索リンク	・授業内のタイムマネジメントが行える。 ・自分の意見の根拠となる情報を選択できる。
表現し、対話を通して吟味する	・デジタル思考ツール	・思考を整理して意見の可視化が行える。 ・自分の意見への追加、変更、共有が図られている。
ふり回り	・ポートフォリオ評価	・新たな「問い」を見つける。 ・次時の見通しが立てられている。

によって実際に現地に行って調べられない情報が見られたり、必要な情報だけを切って貼り付けたりすることなどができる。さらに、ICTと思考ツールを同時に利活用することで意見を裏付ける根拠を可視化させ、グループや全体で交流を図ることで思考の整理も行える。このように、デジタルだからこそできる良さを適切に生かし、学びの質を高めていく。

3 学び合いについて

(1) 深い学びとは

中央教育審議会は深い学びについて「知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり問題を見いだして解決策を考えたり思いや考えを基に創造したりすること」と示している。田村(2018)は「問題を解決するプロセス、解釈し考えを形成するプロセス、構想し創造するプロセスなど、教科等固有のプロセスが一層充実するようにしたい」と述べている。

これらから本研究では、深い学びに繋げていくために問題を解決していく過程や意見を形成していく過程で今までに学んだ知識や技能を活用できるような授業展開を計画する。対話を通して様々な意見を吟味し、改めて自分の意見を再構築していくことで新たな「問い」や考えが生まれる児童の姿を本研究では深い学びの姿と捉える。

(2) 社会科における学び合い

学び合いにおいて自分の意見を言語化する活動は重要である。中央教育審議会は、「言語活動の目的は、言語活動を通して、自分の考えを広めたり、深めたりすること」と述べている。また、「対話とは、『話し合いを通して、他の考えを聞き、自分の考えが広まったり、深まったりすること』である」と示している。

本研究では、社会科において主体的に「問い」を解決していく中で対話という言語活動を通して児童が自分の考えを広めたり深めたりする学び合いを行っていく。そうすることで、自分の考え方に確信を持ったり相手の意見に共感したり、新たな意見や新たな「問い」を再構築したりすることができる。また、実際に見て正解を判断することができない歴史学習において想像を膨らませ、楽しみながら根拠を吟味し合う学び合いを続けていくことで歴史や社会、世の中について理解や関心が高まり同時に社会認識を深めていくであろうと考える。

IV 検証授業

- 1 小単元名 「大陸に学んだ国づくり」
- 2 教材名 「大化の改新と新しい政治のしくみ」(教育出版6年)
- 3 単元設定の理由
 - (1) 教材観(省略)
 - (2) 児童観(省略)
 - (3) 指導観(省略)
- 4 単元の指導目標
 - (1) 単元の目標

知識及び技能	天皇中心とした政治の確立や文化の変化について理解するとともに、遺跡や文化財、地図帳や年表などの各種の基礎的資料を通して、情報を適切に調べまとめる技能を身に付けるようにする。
思考力・判断力・表現力等	古代の日本の政治の仕組みや文化の特色、出来事や人物の関連や意味を多角的に考える力、その時代の社会に見られる課題を把握して、歴史を学ぶ意味を考える力、考えたことを説明したり、それらをもとに議論したりする力を養う。
学びに向かう力・人間性等	古代の日本の政治の仕組みについて、主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、日本の歴史や伝統を大切にして国を愛する心情を養う。

(2) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>①世の中の様子、人物の働きや代表的な文化遺産などについて、遺跡や文化財、地図帳や年表などの資料で調べ、必要な情報を集め、読み取り、大陸文化の摂取、大化の改新、大仏造営、貴族の生活や文化を理解している。</p> <p>②調べたことを年表や図表などにまとめ、天皇を中心とした政治が確立し、日本風の文化が生まれたことを理解している。</p>	<p>①世の中の様子、人物の働きや代表的な文化遺産などに着目して、問いを見出し、大陸文化の摂取、大化の改新、大仏造営、貴族の生活や文化について考え、表現している。</p> <p>②大陸文化の摂取、大化の改新、大仏造営、貴族の生活や文化の様子を関連付けたり総合したりして、この頃の世の中の様子を考え、適切に表現している。</p>	<p>①大陸の文化と日本の政治や文化との関係について、予想や学習計画を立てたり、学習を振り返ったりして、主体的に学習問題を追求し、解決しようとしている。</p> <p>②学習したことをもとに長い歴史を経て築かれてきた日本の伝統や文化と今日の自分たちの生活との関わりを考えようとしている。</p>

(3) 小単元の指導計画・評価計画(全8時間)

時	○主な学習活動	・指導上の留意点 ★教師による ICT の利活用 ■児童による ICT の利活用	□評価規準 (評価方法) デジタル思考ツール(Jamboard)
1 つか む	○遣唐使について調べ、日本が長期間にわたって使節を送った理由を考え、学習問題をつくり、学習計画を立てる。	<p>・遣唐使船に派遣された人数の多さや回数から中国へ渡ることの重要さに気付かせる。</p> <p>★遣唐使船をデジタル教材として提示することで拡大や情報の共有を図る。</p> <p>■デジタル思考ツールを利活用して学習の計画を立てる。</p>	<p>態①学習問題について予想や学習計画を立て主体的に追及しようとしている。 (行動観察・ツール・ノート)</p> <p>思①遣唐使船の様子から、問いを見出し、学習問題として表現している。 (発表・ツール・ノート)</p>
2 調 べる	○聖徳太子について調べてどのような国づくりを目指していたのか、太子の理想がその後の政治にどのような影響を与えたのかを考える。	<p>・聖徳太子が行ったことはどのような国づくりの仕組みに繋がっていくのか自分の意見を交えてまとめさせる。</p> <p>★デジタル思考ツールによって思考の可視化を図る。</p> <p>■検索リンクから新たな情報を選択し、聖徳太子の取り組みの理解を深める。</p>	<p>知①聖徳太子が行った取り組みから、天皇中心の国づくりが進められたことを捉えている。 (発表・ツール・ノート)</p>
3 調 べる (本 時)	○木簡に書かれていることや律令などを捉え、政治の仕組みによりどのような国づくりが行われたか考える。	<p>・税や法律も含め、現在につながるような社会の仕組みが整っていったことに気付かせる。</p> <p>★デジタル教材から当時の都の様子を捉え、天皇中心の仕組みが整えられていったことの根拠となる情報を提示する。</p> <p>■デジタル思考ツールによって思考の可視化や表現の工夫を図る。</p>	<p>思②天皇中心の中央集権体制がつくられていったことを木簡などの資料や律令の内容と関連付けて考え、表現している。 (発表・ツール・ノート)</p> <p>態①大陸の文化と日本の政治や文化との関係について予想し、主体的に追及しようとしている。 (行動観察・ワークシート)</p>

4 調 べる	○大仏づくりについて調べることを通じて、天皇中心の政治の仕組みが整えられていったことを捉える。	<ul style="list-style-type: none"> ・仏教が全国に広がり、大仏づくりの材料が広い範囲から運ばれていることを捉えさせる。 ★デジタル教材から大仏づくりが渡来人と律令のしくみで成し遂げられたことを気付かせる。 ■検索リンクから大仏づくりの様子を捉え大きな事業であることに気付く。 	知① 大仏造営や国分寺の建立などの国家的事業を通して、天皇中心の政治の仕組みが整ったことを捉えている。 (発表・ツール・ノート)
5 調 べる	○鑑真が来日した経緯や正倉院の宝物などを調べ、日本の国づくりとアジアの国々との関わりについて考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・外国での出土品と正倉院の宝物が類似していることからアジアとの関係に気付かせる。 ★検索リンクから正倉院の宝物とアジアとのつながりを捉えさせる。 ■検索リンクから鑑真が来日した経緯などの理解を深める。 	知① 鑑真の来日や正倉院の宝物と外国から出土した品々との比較から、日本の国づくりとアジアの国々との関わりについて捉えている。 (発表・ツール・ノート)
6 調 べる	○貴族の屋敷や暮らしの様子について調べ、貴族の栄えた頃の政治の様子をつかむ。	<ul style="list-style-type: none"> ・貴族の暮らしぶりや服装などに着目して様子を捉える。 ★デジタル教材から寝殿造りや貴族の一日の暮らし方が優雅な様子に気付かせる。 ■検索リンクから藤原道長が権力を付けていった理由を理解する。 	態② 調べたことをもとに、貴族が栄えた頃の文化と今日の自分たちの暮らしや文化との関わりを考えようとしている。 (発表・ツール・ノート)
7 調 べる	○大和絵やかな文字を手がかりに、貴族の時代に生まれた文化を調べ、日本独自の文化がつくられたことをつかむ。	<ul style="list-style-type: none"> ・政治的に安定していったことが日本らしい文化を生み出す要因になっていることに気付かせる。 ★デジタル教材から貴族の優雅な服装に気付かせる。 ■検索リンクから貴族の服装への理解を深める。 	知② 天皇中心の政治体制がつくられたこと、大陸の文化を消化・吸収した日本独自の文化が発達していったことを理解している。 (発表・ツール・ノート)
8 調 べる	○学習してきた、飛鳥時代、奈良時代、平安時代の特徴についてまとめ、大陸の文化が天皇中心の政治の仕組みと関わっていることを考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・天皇よりも力を付けてきた貴族によりこれからどのような国づくりが行われていくか考えさせる。 ★デジタル思考ツールによって思考を整理して表現の工夫を図る。 ■デジタル教材を作成、共有して自分の考えの根拠として活用する。 	思② 大陸から伝わった文化と日本の国づくりを関連付けて考え、表現している。 (発表・ツール・ノート)

5 本時の指導(3/8時間)

(1) 本時のねらい

木簡に記されていた内容や律令の仕組みを捉え、天皇中心の中央集権の仕組みと関連付けて考え、表現する。

(2) 授業仮説

教材との出会いの場面で ICT を効果的に利活用することで、天皇中心の仕組みが整えられていったことの根拠となる情報に気づき、学び合いを通して多様な意見に触れることで考えを広げ深め、新たな「問い」を見付け学びを深めることができるであろう。

(3) 検証の観点

- ① 自分の考えを広げ深められたか。(思考力)
- ② 根拠を基に自分の考えを表現しているか。(判断力・表現力)
- ③ 新たな「問い」を持っているか。(主体的に学習に取り組む態度・思考力)

(4) 本時の評価規準

【思考・判断・表現】

天皇中心の中央集権の体制がつくられていったことを木簡などの資料や律令の内容を関連付けて考え、表現している。

【主体的に学習に取り組む態度】

大陸の文化と日本の政治や文化との関係について予想し、主体的に追及しようとしている。

(5) 本時の展開

	学習活動 【発問】	・指導上の留意点 ■児童による ICT の利活用 ★教師による ICT の利活用	■評価規準 ◇検証の観点
導入 (5分)	1. 前回の疑問や「問い」の確認と共有を図る 2. 本時の「問い」(めあて)を立てる	・天皇中心の国づくりを行っていくことにも触れ、前時の内容を押さえる。 ★本時の「問い」に繋がりそうな「問い」はデジタル化して教師が提示する。	◇③学びを調整しながら新たな「問い」を見付けられるようになっているか。
「問い」(めあて)：新しい政治のしくみによってどのような暮らしになるのか。			
展開 (33分)	3. 予想を立てる 4. 資料を読み取る 【2つの資料からどんなことが言えるか】 5. 探求をする 【木簡ってなんですか？】 【なぜ都に運ぶのか？】 6. 根拠を基にわかりやすく自分の考えをまとめる	・ワークシートに自分の考えを記入して思考の足跡を残せるように支援する。 ★「平城京のまちなみ」の動画と喜屋武のマップから考えられる事を想起させる。 ・道の整備や大人数、たくさんのお金がかかっていることから天皇が大きな権力を握っていることに気付かせる。 ★デジタル教材の木簡や移動距離の地図から律令の仕組みを理解する。 ・木簡の資料からどんなことが書かれているか読み取れるように支援する。(場所、量、品) ・木簡と地図から特産物などが運ばれていたことに気付かせる。 ・律令という税のしくみを教科書から読み取り、庶民の暮らしの厳しさに気付かせる。 ・ワークシートに自分なりのまとめを記入してから相手にわかりやすく表現できるように声をかける。 ・考えのまとめ方を児童自身が選択・判断して学びの調整を行える環境を整える。 ■デジタル思考ツールによって思考の可視化や表現の工夫を図る。	◇②自分の意見を裏付ける根拠を基に考えを表現しているか。 ◇①学び合いを通して考えが広がり深まっているか。
		 <p>根拠を基に自分の考えをまとめている様子</p>	 <p>木簡とはなにか対話を深めながら考えている様子</p>
			<p>■【思判表】(表現資料・観察)</p> <p>A 評価・現在の政治とつながる文言も明記されている。</p>

	<p>7. グループ学習</p>  <p>8. まとめた考えを全体で共有、吟味する</p>	<p>・対話を通して意見の吟味を図り、自分の考えや根拠の追加・変更があれば赤ペンで記入するよう声をかける。</p> <p>自分の考えを交流している様子</p> <p>・ノートにまとめた児童はカメラで撮ったデータを送って共有を図るよう促す。</p>	<p>C 評価への手だて・・表現資料を指定し、誰のための新しい政治か想起させる。</p> <p>◇①学び合いを通して考えが広がり深まっているか。</p>
<p>終末 (7分)</p>	<p>9. 本時の学習を振り返る</p> <p>【貴族と庶民では食事の差が大きい今後どうなりそうか？】</p>	<p>★デジタル教材の貴族と庶民の食事の写真から大きな身分の差があることに気付かせる。</p> <p>・発問も含めて新たな「問い」を考える。</p>	<p>■【態】(観察・ワークシート)</p> <p>◇③学びを調整しながら新たな「問い」を見付けられるようになっているか。</p>

V 研究の結果と考察

「大陸に学んだ国づくり」では児童一人一人に探求方法や表現方法を選択・判断させる機会を設け、学び合いを通して様々な意見に触れることで学びの調整が行われてきた。そこで、ICT を効果的に活用した学び合いを様々な学習場面で行ったことで期待される児童の姿(表1)が見られたか。また、学びを調整しながら新たな「問い」を見付け、「思考力・判断力・表現力」が育まれた児童の姿について検証前と後のアンケートで比較分析し、児童のデジタル思考ツールやポートフォリオ評価などの資料から考察していく。

1 ICT を効果的に活用した際の児童の姿

(1) 教材と出会う場面

第1・3・4・6・7時においてデジタル教材を活用して本時の授業展開に繋げていった。その中で児童の様子から1・3・6時においては児童同士で画面を拡大して比べ、印を付けて教材の特徴について対話の促進を図ることができていた。教材を何度も見比べて友だちの画面に指差ししながら教材の特徴を見つけていた(資料1)。しかし、一方でデジタル教材にしたことで画質が荒くなって見づらくなった教材もあり、教科書の資料の方が良さを感じる場面もあった。その時には児童はデジタル教材にこだわらずに教科書の資料を見る児童が多くみられた(資料2)。事後アンケートからは「デジタル教材を学び合いに活かしたか」という質問に「あて



資料1 教材を見ながら対話を行う様子



資料2 教科書の資料を見る様子

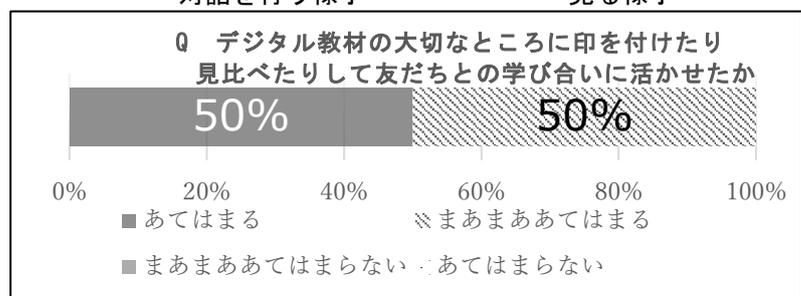


図3 デジタル教材を学び合いに活かしたかに関するアンケート

はまる」「まあまああてはまる」の肯定的な回答が 100%となっている(図 3)。理由として「教科書に載っていないこともわかる」「いろんな資料と見て比べられる」「自分の考えをまとめる時に活用できる」などが挙げられた(資料 3)。これらのことから、デジタル教材を活用することで児童同士が資料の大切なところや特徴について思考し、学び合いを通して多様な見方や考え方を働かせたことで思考する力が深められたと考えられる。しかし、教師の提示するデジタル教材の情報を絞りすぎると情報を関連付けて考えられなくなったり、児童の思考を誘導してしまったり考え方が浅くなる場面が本時でもみられた。

- ・教科書に載っていないことも分かるからよかった。
- ・動画がわかりやすい。
- ・いろんなサイトの資料と見て比べられる。
- ・考えをまとめる時にデジタル教材を活用できる。
- ・同じ資料を見ながら話ができる。

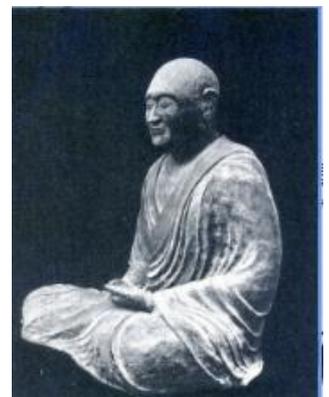
資料 3 デジタル教材に対する意見の一部

(2) 探求する場面

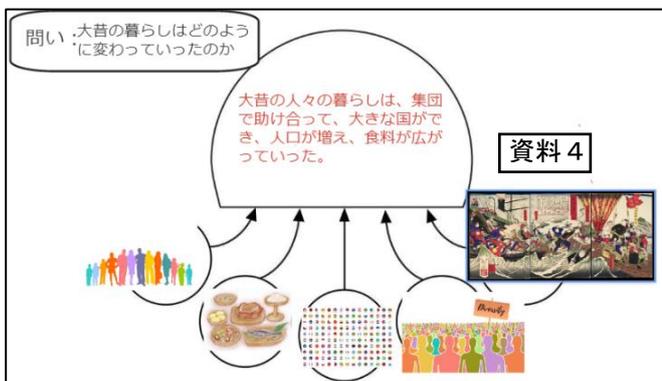
第 5 時にはインターネットを使って実際に正倉院に収められている宝物を検索できる検索リンクを児童に送った。その結果、アジアと日本とのつながりについて考え、中国や朝鮮半島を窓口に大陸の文化が伝えられてきたことを正倉院の宝物から推測していた。また、教師が意図して送った検索リンクも活用していたが、児童による検索リンクの利活用が多かった。知らない単語や疑問に思った事をすぐに検索して自分なりに解釈を深める場面が見られた。第 6 時では貴族の行事や遊びについて検索をし、理解を深めている児童もいた。教科書にのってはいないが、平安時代の今につながる文化を児童が検索し、相撲やひな祭りなどの新たな情報を発見していた。さらに、自分の意見の根拠となる情報を検索し、意見に合う画像などを選択できるようになってきた。検証前はその時代に合わない抽象的なイメージで資料を選ぶ児童もいた(資料 4)。そのため、交流などで何を表しているのか分からないという指摘もあり相手にも伝わるような根拠の画像を選ぶことができていなかった(資料 6)。検証後では仏教によって暮らしが変わっていったことを表すためにその歴史に合わせた資料を選択するようになってきた(資料 5)。誰が見ても鑑真だとわかり、その横には付箋で「正しい仏教を広めた」と補足説明も足され、自分の考えた根拠に解釈の跡がみられるようになった(資料 7)。事後アンケートからはすぐに検索できる環境が設定されていたことで「すぐに調べられる」「意見をまとめる時に調べられる」「教科書と比べながら調べられる」といった ICT の良さを感じて



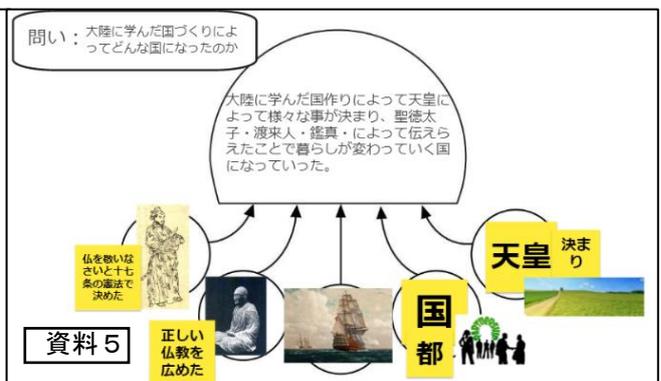
資料 4 検証前に選んだ根拠の一部



資料 5 検証後に選んだ根拠の一部



資料 6 児童 A の検証前の根拠の表し方



資料 7 児童 A の検証後の根拠の表し方

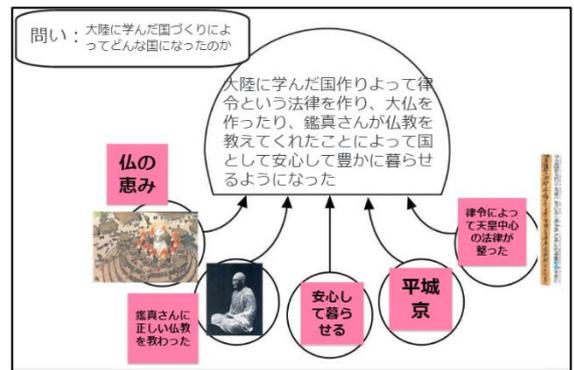
いる児童がみられた(資料8)。これらのことから、自分の意見の根拠となる情報を検索したり、教科書との情報と比べたりすることで自分の意見に合う情報を思考し、選択・判断することができるようになってきていると考えられる。しかし、タブレットで簡単に検索できるからこそ伝えたいキーワードで検索してしまい、抽象的なイメージの根拠を選択することもあった。また、幅広く検索して根拠を吟味し過ぎることで必要な情報はどれなのか選択・判断に迷ってしまい、ふり返りの時間が取れなくなる児童の姿もみられた。

- ・タブレットで色々調べられて、いろんなことがわかった。
- ・6年生になってタブレットで学習して意見をまとめる時に知りたいことがすぐに調べられたから便利だった。
- ・タブレットを使うことで色々調べられるから良い。
- ・教科書と比べながら色々なことが調べられた。

資料8 探求する場面に対する意見の一部

(3) 表現し、対話を通して吟味する場面

第2・8時にはデジタル思考ツールを活用して意見と根拠を整理して書くことができるチャートを用意した。そうすることで、デジタル教材をそのまま根拠として活用したり、自分で検索した画像を貼ったりして相手にもわかりやすく表現することができていた(資料9)。アンケート結果から「自分の意見を根拠をもってわかりやすく説明することができる」という質問に対して「あてはまる」「まあまああてはまる」と回答した児童が66.7%から90%へと23.3ポイント増加した(図



資料9 児童Bのクラゲチャート

4)。また、これらのことから、デジタル思考ツールを利活用することで探求したことがそのまま根拠として貼れて、画像と言葉どちらも利用して根拠を表現できるので相手にわかりやすく表現する力が伸びた児童が増えたと考えられる。また、学び合いを重ねていく

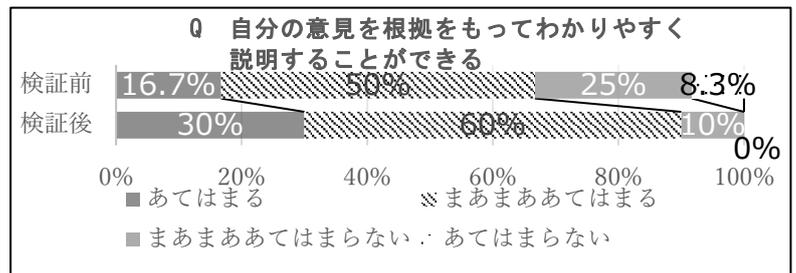


図4 根拠をもって説明できるかに関するアンケート

ことで自分の意見に対する根拠の表し方が抽象的から具体的になっていったことで根拠をもってわかりやすく説明することができた児童が増えたと考えられる。一方で、必ずしもデジタル思考ツールを利用するのではなく児童自身で選択・判断してノートに意見をまとめる児童もいた。さらに、根拠を調べる時はタブレットを活用し、意見を表現する時は紙の思考ツールを選択して効果的にICTを利活用する児童もみられた。

(4) ふり返りの場面

本単元ではポートフォリオ評価に「問い」を書いていく活動を手書きで行った。そして、記入された児童の前時の「問い」をピックアップしてデジタル化したものを授業の導入へつなげる方法を取り入れた(資料10)。その結果、児童自身の「問い」を解決していく流れができ、教師主導の授業ではなく主体的

- ・天皇に従わない人はいなかったのか。
- ・天皇中心のきまりはなかったのか。
- ・大仏をつくった後はどうなったのか。
- ・どうやって仏教は広まったのか
- ・大陸の文化が入らなくなってどんな国になるのか。

資料10 ピックアップした児童の「問い」の一部

な探求学習にすることができた。アンケート結果から「ふり返りや授業の終わりに新たな疑問を持つことがある」という質問に対して「あてはまる」「まあまああてはまる」と回答した児童が

58.3%から90%に31.7ポイント増加した(図5)。これらのことから、教師が設定した「問い」ではなく、児童から生まれた「問い」をデジタル化して全体で共有を図り、主体的な探求学習を進めることで、ふり返りでは「なぜ」「どうしてだろう」と思考し、児童は新たな「問い」を持つことが出来たと考えられる。

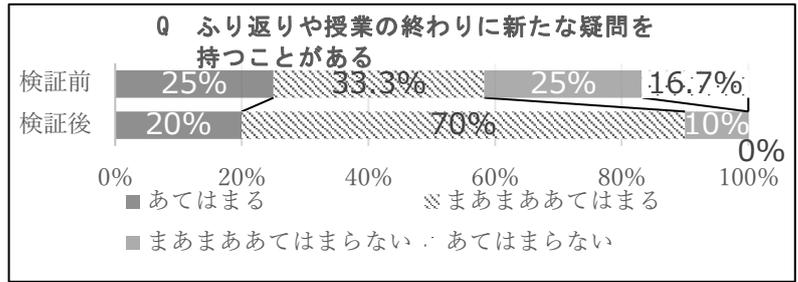
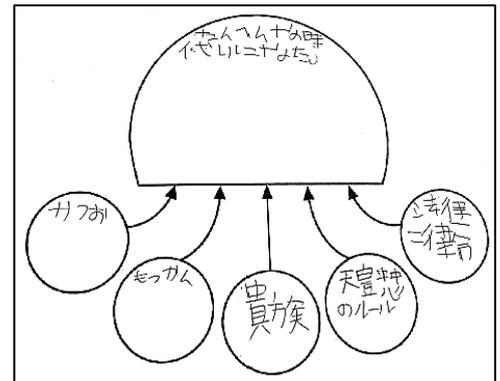


図5 新たな疑問を持つことがあるに関するアンケート

2 学びを調整しながら「思考力・判断力・表現力」が育まれた児童の姿

(1) 意見の表現方法の選択・判断を通して

検証授業で自分の意見をまとめる時には児童のまとめやすい方法を選択・判断させて表現させた。そうすることで、デジタル思考ツールや紙の思考ツール、ノートに文章でまとめるなどの方法を選ぶ児童が出てきた(資料11)。学び方を選択させる場を設定することで各自が学びの調整を行えるようにした。意見を交流しやすくするために紙やノートにまとめた児童は写真を撮ってタブレットにアップすることでスムーズに交流も行えた。意見や根拠の表し方にズレが生じた場面では「なぜそのような意見になるのか」「同じ根拠なのになぜ考えが違うのか」などの疑問が生まれた。このような疑問は学び合いを通して相手の解釈を確認することで解決していった。その結果多様な表現方法に触れ、多様な見方や考え方に繋がったと考えられる。アンケート結果から「調べ方や意見の表現方法を考えて選んでいる」という質問に対して「あてはまる」「まあまああてはまる」と回答した児童が58.3%から70%へと11.7ポイント増加した(図6)。これらのことから、自分の学習に合わせた学習方法を考え、選択・判断し、学びを調整することができたと考えられる。



資料11 紙の思考ツールを選んだ児童Cの考え

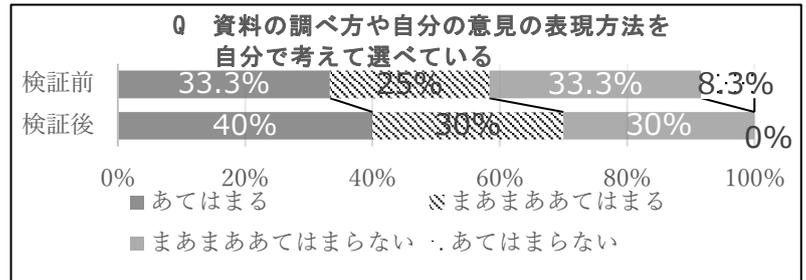


図6 調べ方や表現方法を選べるかに関するアンケート

(2) 他者との学び合いを通して

検証授業ではグループで交流した後自分の意見に活かそう根拠や考えをポートフォリオ評価の自分のまとめの欄に色を変えて他者の考えを追加させる活動を行った(資料12)。同じ考えでも新たに別の根拠も必要だと感じたり、同じ根拠でも天皇の立場や農民の立場で解釈が変わったり意見も変わることに気付くことができていた。アンケート結果から「ペアやグループ学習で友達の意見を聞いて考えが変わることが

<p>自分の考え③</p> <ul style="list-style-type: none"> 大仏づくりは必要じゃなかったと思う。 <p>理由</p> <ul style="list-style-type: none"> この大仏をつくるのに時間、お金、人が多くつかわれるのに、人々は本当に必要だったのか。 大仏をつくってかゆることがなかったら意味がない。 	<p>自分のまとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> 仏教の力を借り不安をほめ国を守る 守ってもらいたい 大変なのにつくっているから必要
<p>疑問・「問い」</p> <ul style="list-style-type: none"> 大仏をつかった後はなにか効果はあったのか。 反対している人はいなかったのか。 	

資料12 児童Dが書いたポートフォリオ評価の一部

できていた。アンケート結果から「ペアやグループ学習で友達の意見を聞いて考えが変わることが

ある」という質問に対して「あてはまる」と回答した児童が41.7%から77.8%へと36.1ポイント増加した(図7)。また、「友だちの意見や根拠に納得できる考えを自分の意見に追加することができる」という質問に対して「あてはまる」「まあまああてはまる」と回答した児童が80%になった(図8)。これらのことから、他者との学び合いを通して考えが変わる児童が増えたということは相手の意見や根拠から新たな見方・考え方を働かせ、新たな「問い」について意見を再構築することで思考の深まりが生まれたと考えられる。さらに、自分の考えに相手の考えも取り入れることで考え方の調整も行えていたと考えられる。これは、児童自身がどの意見が必要か思考し、選択・判断できるようになったからだと考えられる。

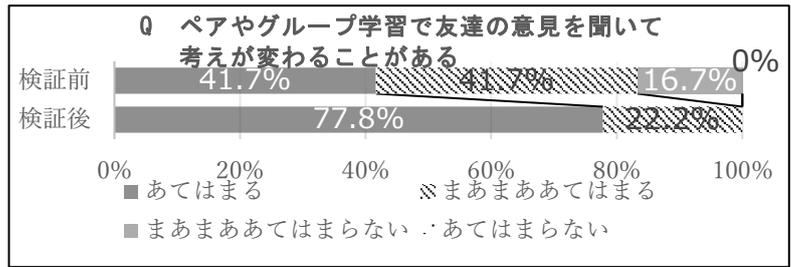


図7 意見を聞いて考えが変わるかに関するアンケート

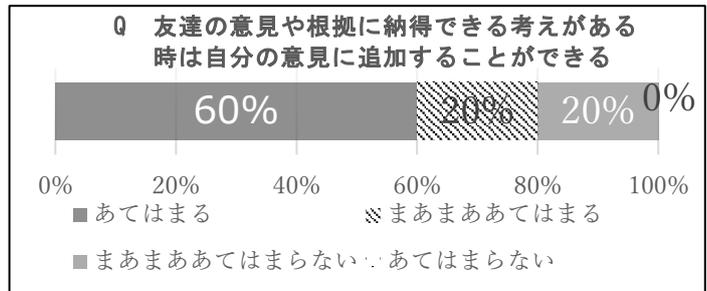


図8 友達の納得できる考えを自分の意見に追加できるかに関するアンケート

VI 研究の成果と課題

1 研究の成果

- (1) ICT を利活用して自分の考えの根拠となる情報を検索、選択・判断し、自分の意見と根拠を分け思考を可視化することで思考力・判断力・表現力の育成に繋がった。
- (2) ICT を利活用した学び合いを通して新たな見方・考え方を働かせ、自分の考えに相手の考えも追加し、意見を再構築することで思考力の向上へと繋がった。
- (3) 思考の足跡を残す一枚にまとめたポートフォリオ評価を取り入れたことで相手の考えを追加する活動が容易になり、新たな見方・考え方に気付くことで新たな「問い」を考えることができた。

2 今後の課題

- (1) 情報を収集し、選択・判断する過程で児童の実態や学習内容に合わせた ICT の効果的な利活用を考えていきたい。
- (2) デジタル教材用のドライブ(共有フォルダ)を児童と共有して、児童が自由に幅広く必要な情報を選択・判断できる場を設定していきたい。

〈主な参考文献〉

- | | | |
|---------|---|------------------|
| 中央教育審議会 | 『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して(答申)【総論解説】』 | 2021年 |
| | https://www.mext.go.jp/content/20210329-mxt_syoto02-000012321_1.pdf | 2022年5月18日取得 |
| 文部科学省 | 『小学校学習指導要領解説 社会編』 | 日本文教出版株式会社 2018年 |
| 文部科学省 | 『小学校学習指導要領解説 総則編』 | 東洋館出版社 2018年 |
| 田村 学 | 『深い学び』 | 東洋館出版社 2018年 |
| 北 俊夫 | 『思考力 判断力 表現力を鍛える新社会科の指導と評価
見方・考え方を身に付ける授業ナビゲート』 | 明治図書出版株式会社 2017年 |